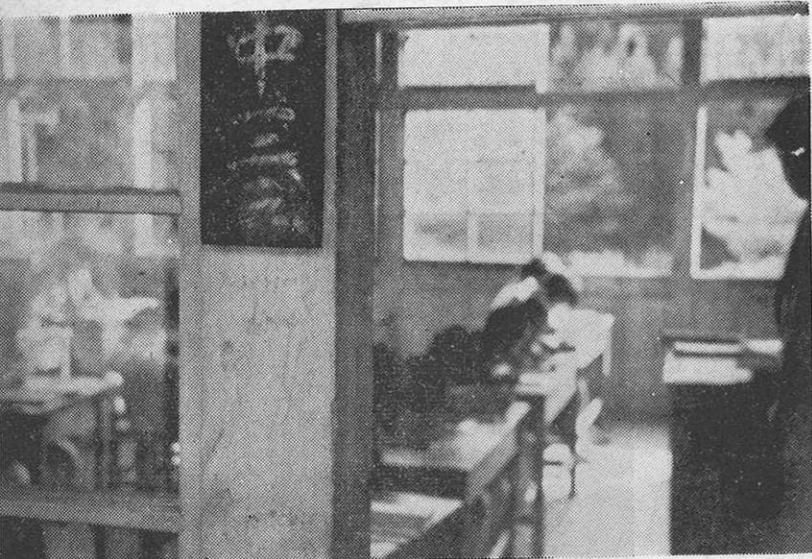


# 僻地に文化を



文化の月におくる

二つのレポート

▽ 「文化国家」から「文化カマド」にいたるまで「文化」と名のつくものにはピンからキリまである。「文化」とは何かと聞き直ればなかなかむずかしいのだが、こゝでは、暮しの中に生きる文化そういつたものに目を向けて、いま一度私たちの生活を見なおしてみたい。これから紹介するレポートは、そんな意味で県の北端と南端に見る、いわば文化というにはほど遠い「僻地の姿」である。(「写真は一年から三年まで一室で授業をうける子供たち……深葉分校にて」)

## （その1） 県境いの僻地「深葉」から

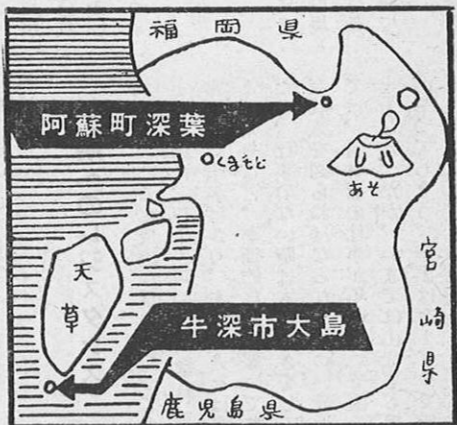
あるものは杉木立ばかり

阿蘇郡と菊池郡の境界線、それが福岡県境に接するところ、阿蘇外輪山の山なみの中に「深葉」の部落がある。

ここは阿蘇郡阿蘇町の一部、だがむしろ、菊池市から菊池水源をさかのぼり、営林署の林道を通つてどうにか行きつけるといふ、全く忘れられた部落である。

およそ文化とは縁のないこの山の中の家数は僅か三十二戸。約二〇〇名ほどの人々が住みついている。畑は殆んどなく、あるものはうつつたる国有林の杉木立ばかり。人々は営林署の仕事に雇われたり、炭を焼いたりして暮している。

三十二年の暮までは電灯も、道路もなく、文字どおり文化にとり残された僻地であったが、いまは電灯がつき、林道も開通して、や



雪の道とランプの灯と

つとこも文化の入口に辿りついたといふかっこうである。

だがこれまでの生活はひどかった。内牧中学校深葉分校の生徒達は、作文にこう表現している。  
道は大変せまく、牛や馬の足あとがデコボコして歩けません。冬は雪が深く積つているので、小さい私達は半分泣きながら、姉さんに手をひかれて、遠い山道を通学しました。姉さん達は大きいのでいいのですが、私達は雪の深いところへくると沈んでしまうのです。

又、電灯のない二、三年前は夜はうす暗いランプの灯の下で勉強しました。ランプのない同級生の家ではコエ松をとぼしていました。

## 十一月の言葉

透明な秋の美しさはこの月にある。空はるり色の陶器のように冷たく澄み、農家の背戸に枝を張つた柿の木は、真赤にかがやく実をその蒼空に象嵌する。

日毎に短くなる日脚は、一瞬をさえ惜しむように地上のあらゆるものに照り映えるが、中でもナラ、カエデ、ハゼ、柿などの紅葉は文字どおり二月の花よりも紅く、年間を通じて最も輝かしい色彩の世界を描き出す。

十一月はまた文化の季節でもある。あたかも自然の美と競うかのように、美術・音楽・芸能など芸術のあらゆる分野が一せいに絢爛たる花を咲かせる。

さらにこの月はスポーツ・シーズンの最後を飾つて、国体をはじめ様々な行事が次から次へと展開する。来年を前に、本県では殊に関心をもたれる季節である。

十月から続いた農繁期は、この月いよいよ最高潮に達する。老人も子どもも、それぞれの役を振られて、全農村の隅々までダイナミックな空気がみなぎる。

すでに確実な五年つゞきの豊作は、誰の顔にも明るい微笑を刻み、多忙と多望との入りまじつた表情で人々は間断なく働いている。

麓田の夕日に多き案山子かな 子規

